藤原豊成板殿の復原について

伊　藤　　行*

RESTORATION OF FUJIWARA TOYONARI'S WOODEN HOUSE

Gyô ITÔ

Fujiwara Toyonari's (藤原豊成) wooden house seems to be very important as a clue to the residential state of the eighth century in Japan. Shôsôin's (正倉院) documents describe the length, width, thickness and number of the building materials. But it is almost impossible to know how the above-mentioned wooden house was built in those days. About twenty years ago, Dr. M. Sekino restored it as a dwelling enclosed by earthern walls, doors, and latticed windows. When Dempôdô, (伝法堂) which was built in the eighth century as a residence, and now is a temple in the eastern area of Hôryûji (法隆寺), was recently dismembered and reconstructed, Dr. K. Asano examined the cut of the wood, and the oldness etc. of the materials, and concluded that the original Dempôdô must have had two different rooms: one being an ordinary room, the other a kind of terrace. Now, the Main House of Daijôgû, (大嘗宮正殿) according to a ninth century document, had also two different rooms, viz. "Do" (堂), an open room and "Shitsu" (室) a closed one. Since Dempôdô and the Main House of Daijôgû are the only examples which enable us to know, in practice (Dembôdô) or from document (Daijôgû), the residential state around the eighth and the ninth centuries respectively, it may be concluded that Fujiwara's house, too, had two different rooms: one being an ordinary room, board-floored, enclosed by doors, latticed windows and a wall; the other, a kind of terrace or open room.

Received June 8, 1961.

§は　じ　め　に

関野克博士が在信楽藤原豊成板殿を復原されたのは凡そ 20 数年前のことである．博士は「在信楽藤原豊成殿板殿復原考」（建築学会論文集 No. 3, 昭和 11 年）「在信楽藤原豊成板殿考」（宝雲，20 冊，昭和 12 年）の二つの玉稿を発表せられた．賛言するまでもなく日本建築史ひいては文化史の研究分野において博士の復原の功績は極めて大きく，我々は今日多大の恩恵をうけている．博士の精緻な分析と考察は，それまで空白であつた領域にあきらかな結実をもたらし，斯界を稗益するところ頗る多大のものであつた．

その後，藤原豊成板殿に関連する研究が二三発表せられた．浅野清博士の「法隆寺東院伝法堂前身建物に関する復元的研究」（建築学会論文集 No. 33, 1944）及び「法隆寺伝法堂前身建物に関する復元的考察（美術研究，No. 145, 1947）である．浅野博士の御研究は現存せる遺構に基いて検討せられた点で，極めて有力な参考資料とすることができる．そこで今一度考察を加え，関野博士とは異つた形式に復原したものがこの論考である．

§復原についての考察

浅野博士は法隆寺伝法堂前身建物を桁行 5 間妻入の形式として復元された．桁行 5 間のうち，奥の 3 間を閉ざされた室とし，前方の 2 間を開放の部分とし，さらにその前方に広い簀子敷があつたものとされた．更に当時の住宅形式を探るに重要な資料を提供するのは貞観儀式大嘗宮の建築である[1]．貞観儀式大嘗宮の悠紀院及び主基院の正殿については次の如き記述がある．

五間正殿一宇．　長四丈広一丈六尺．

5 間の正殿で長さ 4 丈とあるから，1 間は 8 尺となり広さは 1 丈 6 尺即ち 2 間である．後世の 5 間に 2 間の正殿と全く合致する．註に「以二北三間一，為レ室．

* 建築学教室

南戸部レ席．以ニ南二間一為レ堂」とあるのは上代以降の中国に普遍的な形式であつた前堂後室即ち堂室の定制なるものの反映であろう[2]．後方の室は開口のない閉ざされた空間であり，前方の堂は開放的な空間であること，中国に於いても，我邦においても共通する様である．後段には「其堂東南西三面並表葺簾．裡席障子．但西二間巻簾」とあり，堂は随時開放できるよう，設備されていたことがわかる．

法隆寺東院に於いて発掘された聖徳太子斑鳩宮跡と推定される掘立柱いけ込み穴を主とする遺跡に柱間7尺に近い5間に2間の建物跡が見られるが[3]，掘立柱の建物であること，南北に棟の長い建物であることなど大嘗宮正殿と共通するところが多く，飛鳥時代頃より古くから伝えられる住居形式ではないかと推測される．

仁寿2年852の宇治花厳院文書の

五間桧皮葺板敷東屋一宇

在三面庇 南五間懸板部五枚　東二間懸板部二枚 / 北三間懸板部三枚

もこの系列の中に入る住宅と推測してよいであろう．更にこれは後世の寝殿造にも伝えられ，東三条殿の東対にも見られるごとく，母屋の桁行5間の中，前方3間は開放的に扱われ，後方2間は塗籠とされている．

法隆寺伝法堂の創建は天平年間（729—748）と考えられ，藤原豊成板殿は742—745年ごろ，紫香楽宮の辺に建てられたと考えられるから，年年代的に殆んど近接している．井上充夫氏は「形式一様化の傾向」という極めて優れた玉稿を発表された[4]．氏はある時代・地域における建築およびその細部の形式は，常に一様化するような方向に変化するという命題を提示され，これを形式一様化の傾向と名付けられた．手近かな例では，同一地方には同じ形式の農家を見うけることは誰しも経験することであり，自然界においても地形の侵蝕による削平現象或は一般に potential energy の減少の法則，または熱力学におけるエントロピー増加の法則など同様の傾向性に関するもので，外部的な作用のない場合は事象が一様化し，安定に向うことを示すものである．この形式一様化の命題は示唆に富む，極めて有力なものである．以上の2例，即ち法隆寺伝法堂前身建物と大嘗宮正殿とは室と堂とに分けられている点で共通しており，奈良時代前後においてそれ以外の形式の住宅は今日まで明らかにせられていない．藤原豊成板殿も亦2例と形式を共にした（形式が一様化された）ものとして復原することが最も妥当であると考える．5間の中，後方3間を室，前方2間を堂と考える所以である．

この板殿は右大臣藤原豊成が従3位中納言の頃，紫香楽京に建てた住宅の一部をなす殿舎である．関野博士は最上の主殿とはなし得ず，恐らくそれに亜ぐものであつたろうとされた．私はこれを主屋と見做しても差支えないと思う．宝亀2年771の唐招提寺文書に奈良時代の官吏，外従5位下某の住宅には（所在　左京7条1坊）．

桧皮葺板敷屋	1
板　　屋	4
草葺厨屋	1
板　　倉	3

よりなつている[5] この桧皮葺板敷屋というのは恐らくこの藤原豊成板殿の如きものであつたろう．或い古い伝統をもつ大嘗宮正殿のプランと合流して5間に2間の板敷屋となつていたかもしれない．たとえ藤原豊成の紫香楽の住宅に二つもしくはそれ以上の板敷屋があつたとしても，これと大同小異のものであつたろうと思う．この住宅の系列を大きさの順に並べると，先ず法隆寺伝法堂前身建物（5間×5間）がある．次いで藤原豊成板殿（5間×3間），大嘗宮正殿式殿舎（5間×2間）が挙げられるが，後者の5間×2間のプランに板敷が附されたものは実例で確めることはできないが，藤原豊成以後成立したであろうということは容易に推測される．これは身分の差，財力の差によるものであろうか．或は藤原宮，平城宮，平安宮のそれぞれの朝堂院が時代を降るにつれて規模が小さくなつてゆく如く，時代に基くものと考えるべきであろうか．両者であろう．が，私は寧ろ後者の方が強いと考える．

これは寝殿造りの寝殿，対屋の原基形 Urform をなすもので，庇が4面につき，廊をもつて屋舎を連結すればほぼ寝殿造りができ上るのである．又藤原豊成板殿の厨屋は唐招提寺文書の例から見ても，又この復原屋舎そのものから判断しても，別棟であることは疑いを入れない．

§ 資　　料

資料は正倉院文書で，関野博士がA文書，B文書，C文書と名付けられた三文書が根本資料である．

(i)　A　文　書

大日本古文書（4）（p.528—p.530）に納められている．天平宝字5年12月28日矢口吉人なる書生によ

つて製作された建物の部材の枝数並びに丈尺寸法の勘注書である．考定表に於て＊印を附したものは関野貞博士の転写になる正倉院文書抄によつて正したものである．

(ii) B 文 書

大日本古文書 (15) p. 226—p.227 所載の造石山院所返抄（天平宝字6年7月 21 日）なる文書がこれである．B 文書には板殿とは異る五丈殿（C文書によつて明らかである）の材料に一緒くたになつて記されているので，板殿の材料と五丈殿とのそれをより分けねばならない．関野博士が記されている間柱，板間戸は五丈殿の材料と考えて，ここでは採らなかつた．

(iii) C 文 書

天平宝字6年閏 12 月 29 日附の造石山院所解であり大日本古文書 (16) に収められている．錯簡が極めて多く，その復原は福山敏男博士の非常な御努力と鋭い御洞察によるものである[6]．復原せられたC文書は 206 頁1行目から 208 頁3行目に至り，197 頁7行目に接続し，199 頁3行目に終り，更に 227 頁に連絡し228頁9行目で終るものである．最後に記す右二条殿三宇，依大僧都宣云々とは信楽買筑紫帥藤原殿板屋2宇と法備国師奉入板殿1宇とを指しており，福山博士が発見されたごとく，前2宇の部材はB文書とほぼ一致する．

§ 復　　原

桁行5間の中，3間を「室」とし，2間を「堂」として復原した．扉は伝法堂前身建物の如く復原し，連子窓は扉の左右においた．「室」の梁間3間のところは柱を等間隔に配置し，33. 壁代板を1柱間に4枚ずつ，計 12 枚をあてて壁とした．6. 古麻比は小屋組に棟に平行にわたすもの6枝とし，同じ 6. 古麻比27尺のもの4枝は内法長押の上に，梁行方向にわたすことにした（断面図参照）．これは構造を強固にし，又「室」と「堂」との間に席をかけて間仕切りをするのに役立つものとなる．「堂」の柱間には席もしくは簾をかけるものとした．

庇の17. 古麻比は片側3枝ずつ計6枝とした．2枝の長押が2～3寸の間隔をあけて柱をはさみ，合せて用いられるとき，扉，連子窓以外の柱間には敷板と同じレベルに 30a. 壁持木を用い，その接合部間隙の上に 30. 壁持板をわたした．

35. 庇廻敷板は，専らB文書を主としA文書を副とした．即ち B_{35} では 227 寸のものが9枝あるがこれを 12 枝とすれば総枝数が 62 となり，A文書の数字と合致する．しかも 155 寸が12枝，305 寸が12枝で丁度12枝が3組揃うことになる．これを各6枝ずつ分けて棟に平行に図の如く並べた．280 寸のものは「室」の側に3枝，「堂」の側に7枝置いた．7枝を各広 14 寸としても，歩板の間は 1.9 寸程空く勘定となる．この部分と庇下の突出した板敷部分のみに，広 14 寸の敷板に応じて2寸弱の隙間をもつた簀子敷を復原した．庇は位置を左右どちらかへずらすことを試みたが，この庇廻敷板の配置では，下桁，於桁の位置によつて不可能であつた．そしてこの形式のもの一つしかとり得ず，関野博士の庇位置と全く同一のものとなつた．束柱及桁は図示の如くである．

§ お わ り に

「万葉集」には，数多くの歌に簾が歌いこまれている．奈良時代の貴族，高級官吏の生活と密接な関係のあつたことを伺わしめる．二三の例を挙げると

君待つと吾が恋ひ居ればわが屋戸の簾うごかし秋の風吹く (488)

玉垂の小簀の垂簾（たれす）をもちかゝげいはなさずとも君は通はせ (2556)

玉垂の小簾の隙に入り通ひ来ねたらちねの母が問はさば風と申さむ (2364)

「懐風藻」にも例がある．

披キレ軒ヲ褰ゲテ レ 簾ヲ望ム ニ遙岑ヲ一ヲ．（正5位上紀朝臣古麻呂．望雪．）

褰ゲテ レ帷ヲ独リ坐ス辺亭ノ夕．（正3位式部卿藤原朝臣宇合）

これらの歌は恐らくここに復原した板敷屋舎の「堂」における生活を詠んだものであろう．平安時代寝殿造りに見られる戸外と室内とが判然と区別されない開放的な生活はここらあたりから始まつていることが知られる．勿論「室」は別の生活機能をもち，寝殿造りにおいては塗籠となつてうけつがれている．

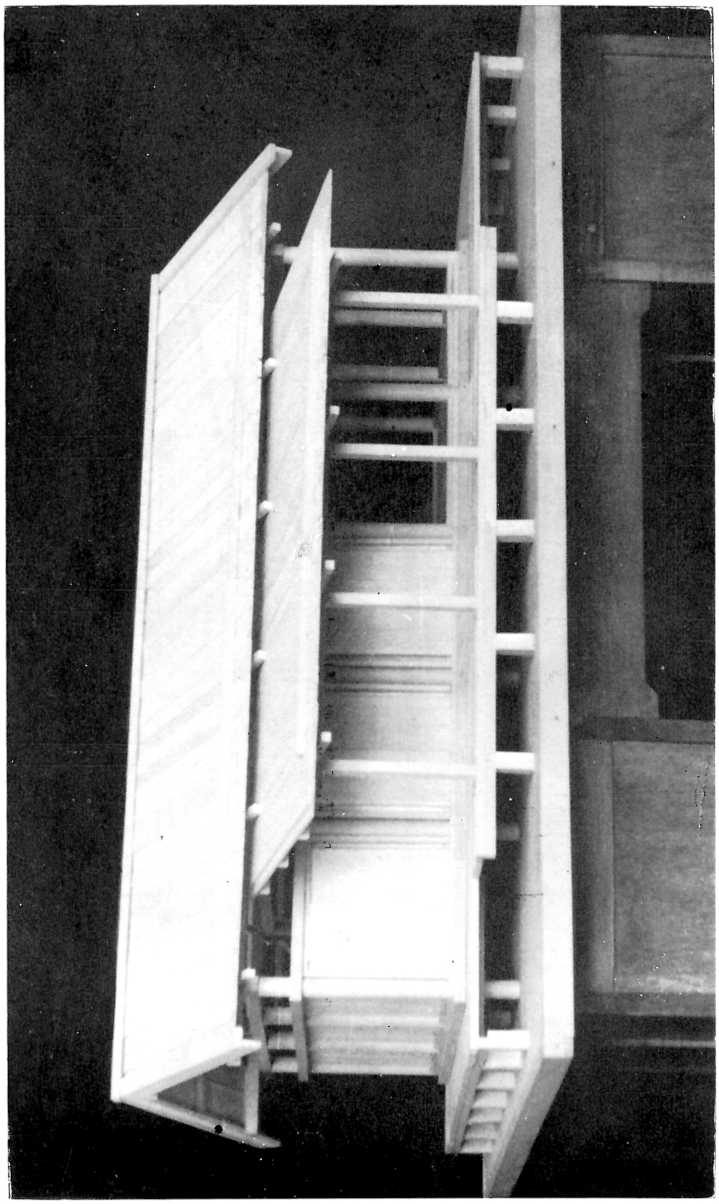
万葉集の

隠口の長谷小国に　よばひせす吾がすめろぎよ　奥（おく）床（とこ）に母は睡たり　外床に父は寝たり　起き立たば母知りぬべし　出で行かば父知りぬべし　ぬばたまの夜は明け行きぬ　ここだくも念ふ如ならぬ　こもり夫（つま）かも (3312)

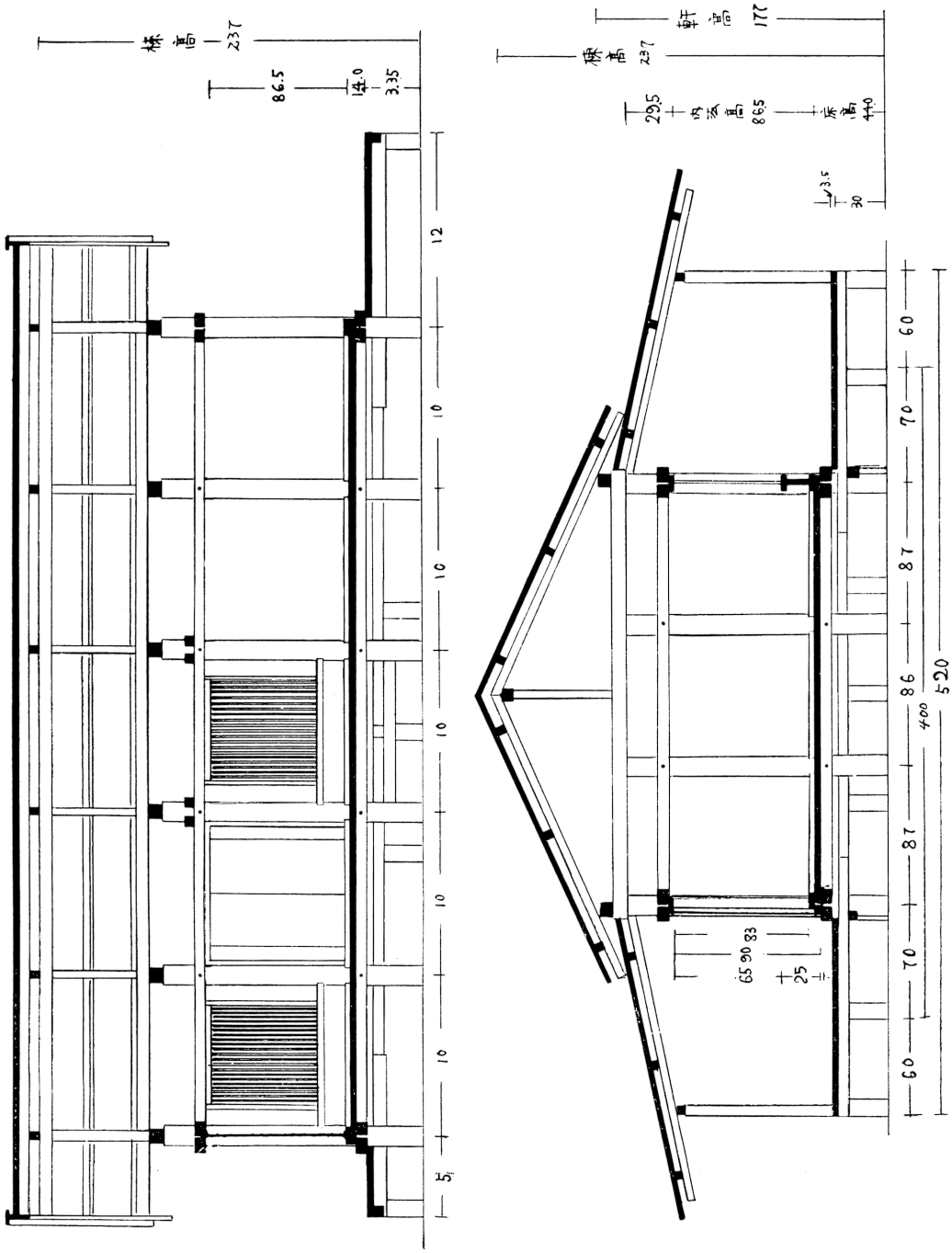
の奥床は「室」の部分を指し，外床は「堂」の部分を示すものとすればいかがなものであろうか．

これは丸田剛敬君との共同研究になるものである．又模型制作にあたつて丸田君が中心となり，三井島洋君，川影豊久君の援助を得た記して厚く謝意を表する

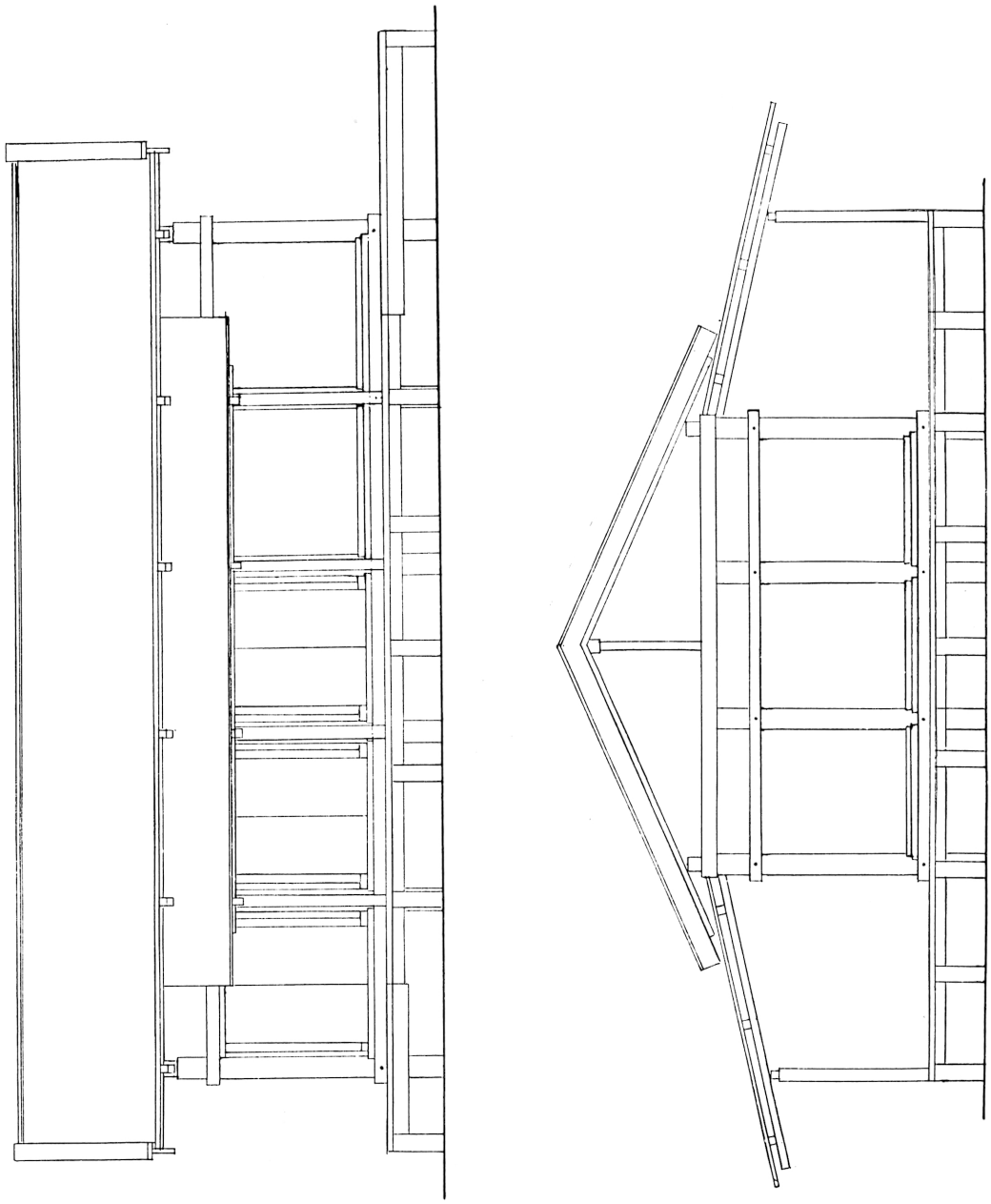
(注) 1) 関野克博士「貞観儀式大嘗宮の建築」(建築史, 1の1, 1の2, 昭和14年)
2) 〔論語・先進〕由也升堂矣, 未入於室也.
〔後漢書・橋玄伝〕以幼年, 逮升堂室.
3) 「世界美術全集9」p. 10, 挿図21のd.
4) 日本建築学会研究報告 No. 18, 昭和27年5月.
5) 関野克博士「古文書による奈良時代住宅建築の研究」(建築学会論文集 No. 5, 昭和12年3月)
6) 福山敏男博士「奈良時代に於ける石山寺の造営」(『日本建築史の研究』所収)



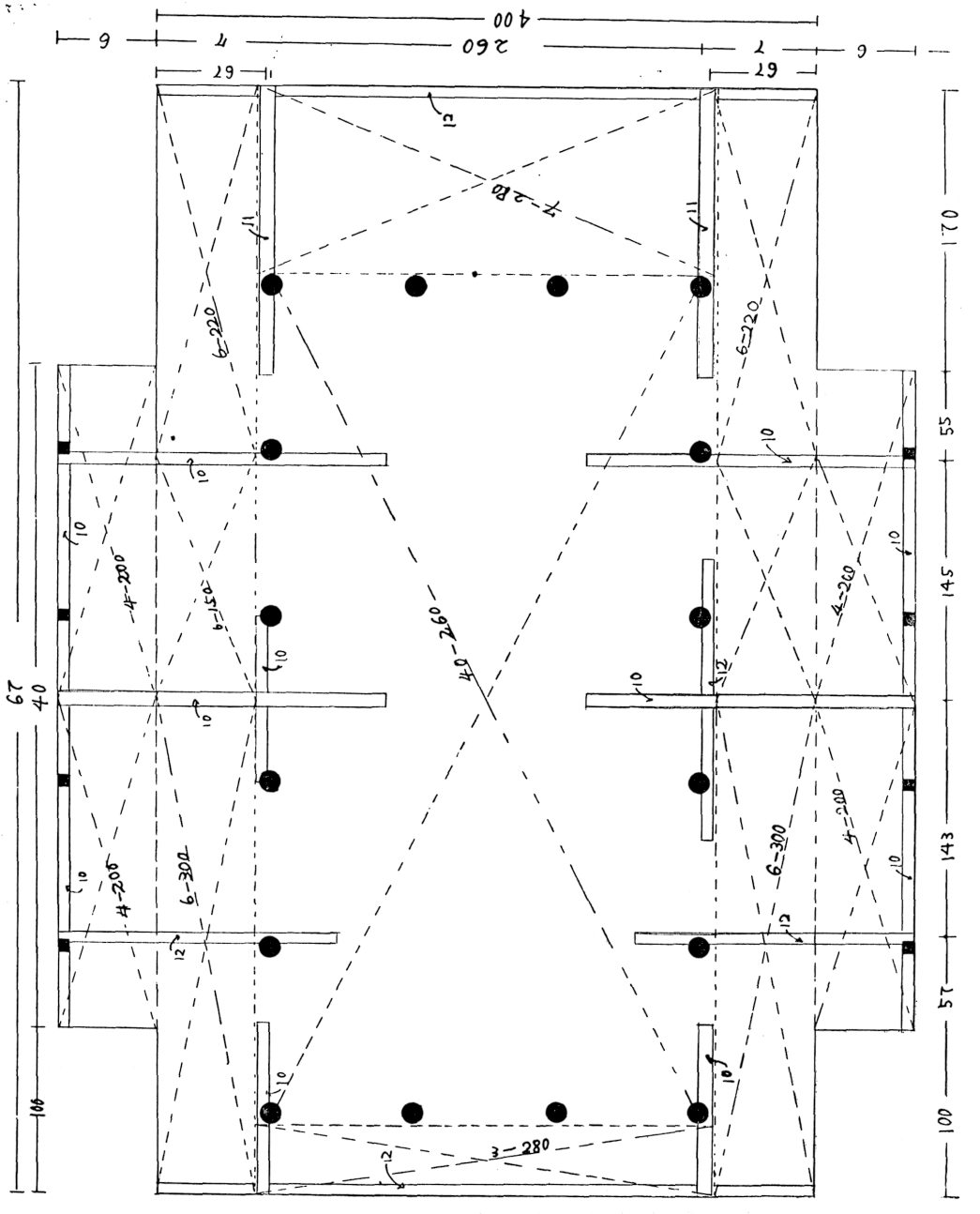
藤原豊成板殿復原模型（1/15）



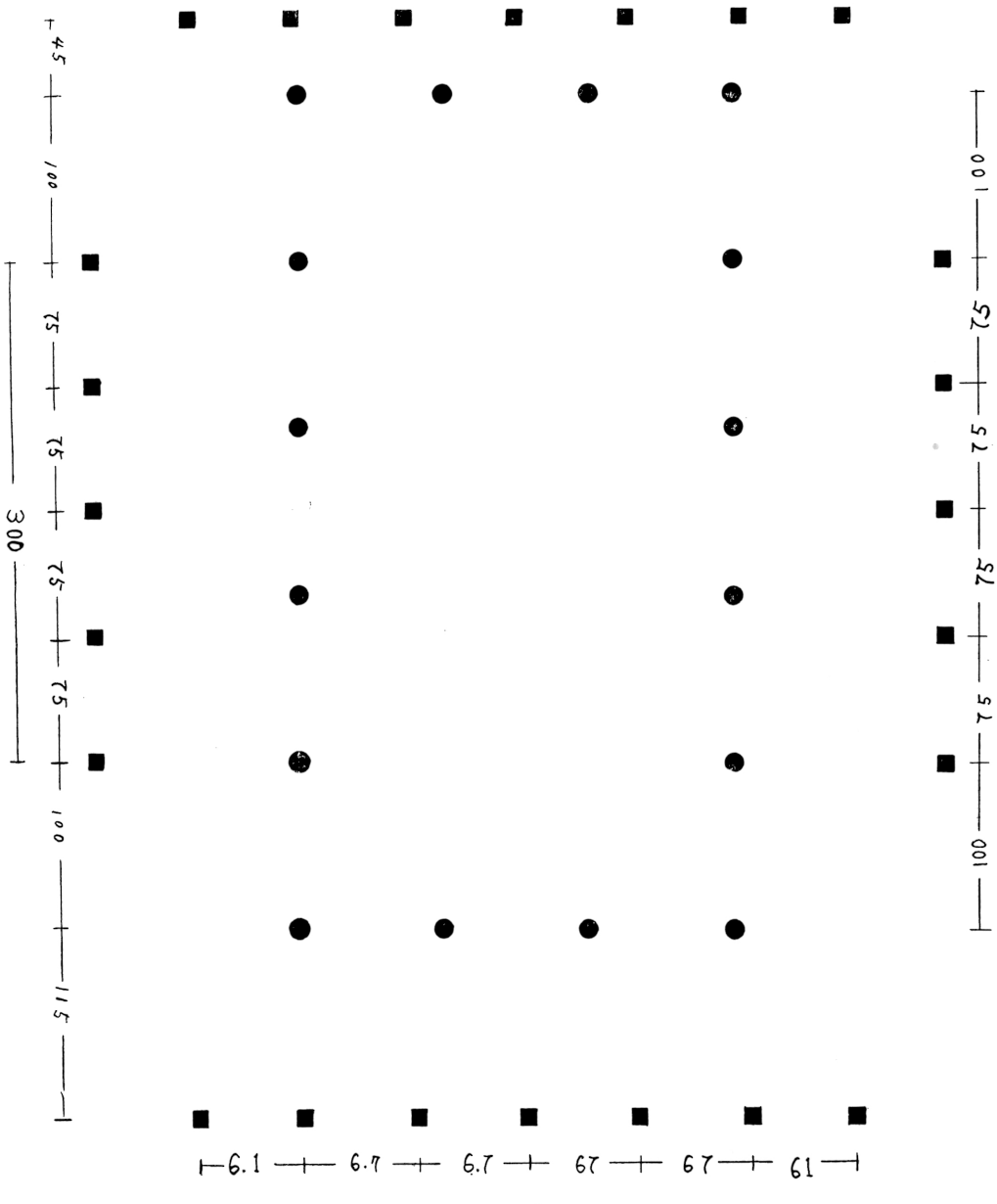
桁行方向断面図・梁間方向断面図・縮尺百三十分ノ一（単位寸）



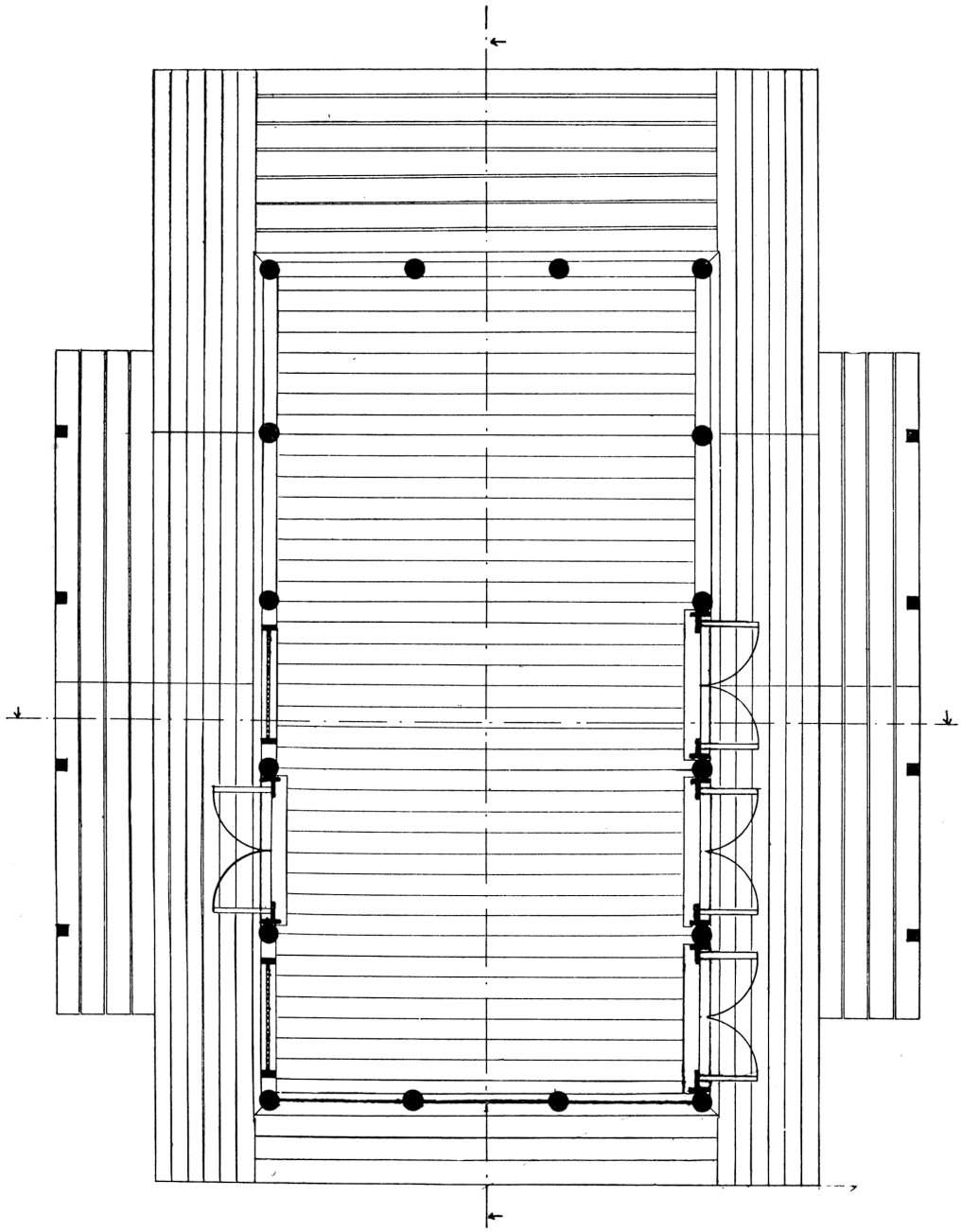
正面立面図・側面図・縮尺百三十分ノ一



於桁・下桁・継物配置図・縮尺百三十分ノ一（単位　寸）



柱・束柱・配置図・縮尺百分三十ノ一（単位寸）



平面図・縮尺百三十分ノ一

在信楽藤原豊成板殿用材考定表

	A 勘注北殿			B 造石山院所返抄			C 造石山院秋期告朔			関野博士考定			考定		
	天平宝字5年12月28日			天平宝字6年7月21日			天平宝字6年閏12月29日			昭和11年3月20日			昭和34年12月25日		
			寸			寸			寸			寸			寸
0	長		500				長		500	長		500	長		500
	広		260				広		260	広		260	広		260
	高		160							高		160	高		160
		枝	寸・径・寸		枝	寸・径・寸		枝	寸・径・寸		枝	寸・径・寸		枝	寸・径・寸
1	柱	14	200・10・10	柱	15	190・ 12	柱	16	190・ 13	柱	16	190・ 12	柱	16	190・ 12
2	梁	6	270・9・8	梁	6	276・9・9	棟	6	276・9・9	梁	6	276・9・9	梁	6	276・9・9
3	桁	2	600・9・※8	桁	2	600・8・8	桁	2	600・8・8	桁	2	600・8・8	桁	2	600・8・8
4	宇太知	2	70・8・6	宇立	※2	60・7・5	宗立	2	6・7・4	宇太知	2	60・7・5	宇太知	2	60・7・5
5	垂木	12	150・5・5	佐須	12	190・5・5	佐須	12	190・5・5	垂木(佐須)	12	190・5・5	垂木(佐須)	12	190・5・5
6	古麻比	8	600・5・5	古麻比	6	300・5・5	古麻比	6	300・6・6	古麻比	3	600・5・5	古麻比	6	600・5・5
					5	370・5・5		5	370・6・6		5	600・5・5		4	270・5・5
					3	270 5・5		5	270・6・6						
7	棟	1	600・9・9	宗	1	600・8 8	宗	1	600・8・8	棟	1	600・8・8	棟	1	600・8・8
8	長押(上下)	6	500・8・5	長押	8	300・9・7	長押	16	300・9・7	長押	8	500・9・7	長押	8	500・9・7
		6	260・—・—		4	376・9・7		4	376・9・7		8	276・9・7		8	276・9・7
					4	276・9・7		4	276・9・7						
9	搏風	4	150・10・2	搏風	4	210・11・3	比宜	4	200・11・3	搏風(比木)	4	210・11・3	搏風(比木)	4	210・11・3
					3	190・11・3				搏風覆	4	210・11・3	搏風覆	4	210・11・3
10	桁	4	600・9・9	下桁	3	100・7・7				下桁	4	100・7・7	下桁	3	100・7・7
					4	200・7・7					8	200・7・7		8	200・7・7
					2	190・7・7									
					2	195・7・7									
11				継物	2	170・—・—	端継桁	2	170・9・9	端継桁	4	170・7・7	端継覆	2	170・9・9
12				於桁	3	170・6・6	於押	3	170・6・6	於桁	4	170・6・6	於桁	3	170・6・6
					1	380・6・6		2	400・6・6		2	400・6・6		2	400・6・6
					1	400・6・6									
13	触柱	24	※30・6・6	東柱	16	60・10・10	東柱	24	60・11・11	東柱	24	60・10・10	東柱	24	60・10 10
14	甍覆樋代	1	600・10・5	樋	1	220・—・—	宗覆	1	600・8・4	甍覆	1	600・10・5	甍覆	1	600・10・5
					1	200・10・6									
15	柱(庇)	8	180・5・5	四面柱	3	90・7・7	四面柱	8	90・7・7	柱(庇)	8	90・7・7	柱(庇)	8	90・7・7
16	桁(庇)	2	340・5.5・5.5	古麻比	1	340・5・5	古麻比	2	340・6・6	桁(庇)	2	340・5・5	桁(庇)	2	340・5・5
17	古麻比(庇)	8	340・※5・※5	古麻比	2	400・5・5	古麻比	2	400・6・6	古麻比(庇)	4	400・5・5	古麻比(庇)	2	400・5・5
					1	250・5・5		4	250・6・6		4	400・5・5		4	400・5・5
					1	165・5・5		1	160・6・6						
					4	—・—・—		3	155・6・6						
18	垂木(庇)	8	140・5・5	垂木	24	180・5・5	垂木	8	160・7・7	垂木(庇)	8	180・5・5	垂木(庇)	8	180・5・5
19	葺板	員不知	—・—・—	蘇岐板	370	190・—・—	蘇岐板	400	200・—・—	葺板	400	190・—・—	葺板	370	190・—・—
20	戸	4	88・90	戸	8	90・35・3.5	扉	8	90・35・4	扉	8	90・35・3.5	扉	8	90・35・3.5
21				閾	4	90・10・3.5	閾	4	90・—・—	閾	4	90・10・3.5	閾	4	90・10・3.5
22				辺附	8	85・10・3.5	辺附	8	90・—・—	辺附	8	85・10・3.5	辺附	8	90・10・3.5
23				桙立	5	90・10・3.5	桙立	8	90・—・—	桙立	8	90・10・3.5	桙立	8	90・10・3.5
24				目草	6	90・10・3.5	目草	4	90・—・—	目草	4	90・10・3.5	目草	4	90・10・3.5
25							鼠走	4	90・—・—	鼠走	4	90・10・3.5	鼠走	4	90・5・3.5
26	牆	2		敷見	2	90・—・—	閾	2	90・—・—	閾	2	90・10・3.5	閾	2	90・10・3.5
27				辺附	5	65・—・—	辺附	5	66・—・—	辺附	4	65・10・3.5	辺附	4	65・10・3.5
28				上下目草	2	65・—・—	目草	2	66・—・—	目草	2	65・10・3.5	目草	2	65・10・3.5
29				連子	23	63・3.5・3.5	連子	48	66・—・—	連子	48	63・2・2	連子	48	63・1.5・1.5
30	壁持板	12	90・10・3							壁持木	12	90・3.5・3.5	壁持板	12	90・10・3
30a				壁持板	10	90・3.5・3.5	壁持木	21	100・4・—				壁持木	12	90・35・35
81				間柱	7	109・—・—				間柱	8	109・3.5・3.5			
32				板間戸	15	90・—・—				板間度	16	90・—・—			
					4	70・—・—					4	70・—・—			
33	壁依板	12	90・20・1	壁代板	8	90・20・—	壁代板	10	90・2・—	壁代板	12	90・20・1	壁代板	12	90・20・1
					4	109・20・—		4	20・20・—						
34	敷板	40	以上 260・10・3	歩板	35	258・11・4	歩板	41	258・21・4	敷板	40	258・12.5・3.5	敷板	40	258・12.5・3.5
					5	260・10・—									
35	庇廻敷板	62	以上 —・10・3	歩板	12	155・13 3.5	歩板	47	208・13・3.5	庇廻敷板	32	200・12.5・3.5	庇廻敷板	12	150・10・3.5
					16	205・14・4								16	200・14・3 5
					10	280・10・—					10	270・12.5・3.5		10	280・14・3.5
					9	227・10・—								12	220・10・3.5
					12	305・10・—		12	305・14・4		20	300・12.5・3.5		12	300・10・3.5
36				片樋(宇助)	1	300・5・5	棉梠	1	300・—・—		4	270・5・5		4	270・5・5
					3	260・5・5		3	200・—・—						
					2	160・5・5		2	160・—・—		4	160・5・5		4	160・5・5